

メキシコの学生運動とラテンアメリカの社会変動

アンドラーデ, G

1968年の9月と10月、メキシコで起っていた事件に、世界中が注目していた。7月以来、学生たちは街頭に出て、場合によっては実力でオリンピックを阻止する勢を見せた。オリンピックの実現に非常な関心をもっていたメキシコ政府は、学生たちのデモに激しく反撥し、ついにはテトラル広場で何百人もの死者をだすに至ったのである。

メキシコの青年たちの、この革命的な爆発については、色々な解釈がなされてきた。しかし、このような運動が、中南米の社会変化においても意義の一例として、メキシコの事件は、類似した他の多くの運動を理解するための「カギ」となるだろう。

一般に、学生運動を説明するには、さまざまな理論がある。ある人たちは、マルクス主義の方式にしたがって、それを、社会革命を引き起こすのに必要な暴動として解釈している。というのは、その理論にしたがえば、学生は社会の矛盾をもっとも鋭く感ずるからである。その「精神の純粋性」によって、彼らは、経済過程の、いわば触媒となるのである。彼らは革命の前衛なのである。しかし、ルイス・フォイヤー（注1）の唱えるような他の理論によれば、学生運動は、単に世代間の斗争の表われに過ぎないのである。だから、学生は、本来は社会斗争の旗手ではなくて、老若の間の矛盾や反目を表現しているのである。メキシコの事件についても、この二つの思想の流れが見られる。今のところ、この学生運動の意味について決定的な解答を与えるには時期尚早ではあるが、私なりに、その説明を試みて見たいのである。そのためには、事件の詳細に立ち入る前に、メキシコの歴史とその政治組織について若干述べておきたい。そして最後に、今日までに提示されている解釈のいくつかを示唆し、もっとも現実に近いと考えられる解釈提示して一応の結論としたい。

I 革命の歴史

1910年、フランシスコ・マデーロ（Francisco Madero）は、独裁者ポルフィリオ・ディアス（Porfirio Diaz）の政府に対して反乱を起こした。その旗印は、更に政

権にとどまることを望んでいた「独裁者」の再選に反対することであった。それは、再選反対という、まったく政治的な動機によるものであったが、それによって社会革命が引き起され、メキシコは、社会主義形態の政府の樹立を試みる、西欧世界で最初の国となったのである。この時期は、ポルフィリオ・ディアスの後を継ぐと望む、さまざまなカウディーリョ間の武力斗争によって特徴づけられていた。ポルフィリオ・ディアスは、1876年から1911年にかけてのその治政によって、メキシコにいわば政治的空白を生みだしたのである。パンチョ・ビーリャ (Pancho Villa)、エミリアーノ・サパータ (Emiliano Zapata)、カランサ (Carranza)などは、メキシコ史を知っているものにはなじみ深い名前である。その中でも、サパータは、革命と土地を求める叫びによってひときわ目だった。彼はラティフンディオをなくする農地改革を主張したのである。このラティフンディオは、ポルフィリオ・ディアスの経済発展政策の結果、増大していたのであった。鉄道によってメキシコの都市間に新しい交通手段が開かれるにつれ、隣接地はラティフンディオの主人たちのいわば帝国に変えられていたのである。「エンコミエンダ」制度は、植民地時代を通じて、ラティフンディオを生み出していたが、それは、「独裁者」がその友人たちに与えた土地の寄贈によって再強化されるにいたった。メキシコの1917年の憲法が、農地改革、最低賃金制、8時間労働制などの原則を制定するにあたっては、サパータを顔目とする革命的な左翼の「スローガン」を法制化せざるを得なかったのである。

ついで、メキシコ革命の歴史は、1917年～1940年の第二期に入る。この時期が特徴をもっているとすれば、それはメキシコ憲法の社会主義的な原理の強化期であったことであろう。アルバーロ・オブレゴン (Alvaro Obregón) は、ルイス・モローネス (Luis Morones) の引きいる労働者組織 (メキシコ労働者地域連合) の支持によって、憲法の労働法規定を実施したのである。カリェス (Calles) (1924年～1934年) は、モローネスの支持をあてにしていたが、農地改革事業を強行し、カトリック教会を攻撃した。そのため、いわゆるクリステロス (Cristeros) の革命が起こったのである。彼は、英国の石油会社の収用を始めた。しかし、メキシコの農地改革を決定的に推進することとなったのは、ラサロ・カルデナス (Lázaro Cárdenas) (1934年～1940年) であった。彼は、今日でも、メキシコの左翼の大長老である。

1940年から現在までの時期は、メキシコ革命における右派の優勢によって特徴づけられる。世界大戦のような外部的要因によって、政策は右よりになった。というのは、メキシコは米国の側についたからである。したがって、地理的に米国と隣接していることもあって、メキシコはその左翼的傾向を緩和しなければならなかった。そして、メキシコは外資の投下を必要とする経済発展期に入った。更には、巨大なアシエンダの解体をとともう農地改革政策は、大規模な農業経済の実現をほとんど不可能にしていたのである。したがって、ここ30年来は、表面的には農地改革は維持されていたものの、とりわけ米国に隣接する北部地域においてはアシエンダの拡大傾向が目だっているのである。

II 政治制度

革命の結果として、メキシコには単一政党制が樹立された。国民革命党(PNR)が、1928年、革命の諸勢力を糾合して設立された。それは、1937年には名前をメキシコ革命党(PRM)と変えたが、1946年には立憲革命党(PRI)と再度名称を変更したのである。この政党は40年以上にわたってメキシコを支配してきており、他の政党も存在するものの、それらは、ごく最近までは政府に何らの痛痒を感じさせなかった。しかしながら、近年、国民行動党(PAN)が、いくつかの知事職などにつくのに成功したのである。さて、立憲革命党が、国内において他のラテン・アメリカ諸国には例のない安定性を獲得してきた秘密は、何であろうか？ 第一に、それは、設立にあたって、労働者組織、農民、軍隊、ホワイト・カラーにその政治的基盤をすえたことである。すべてこれらのグループは、革命の理念のもとに、まとまりのよいブロックに組織されたのである。その上、それは全くナショナリズムの色調をおびていたので、革命はメキシコ国家と緊密にまじりあうこととなり、革命に反対する者は祖国を裏切る者であるとされたのである。また、この政党は、ヴィンセント・パジェット(注2)が指摘しているように、次のような機能を果たしてきた。つまり、選挙組織としての機能、幾つかのグループにとって団結のシンボルとしての機能、政党を構成する数グループ間の意志疎通機関としての機能である。これらすべての要因により、また、非常に強力な財政基盤をもつことによって、PRIは政権にとどまってきたのである。メキシコのすべての公務員は、一定の割り当て金を出すことによって、この党に貢献しなければならない。したがって、党財政上の問題など存在しないわけである。

最後に、どのようにして、すべての左翼的および右翼的な傾向が、共に革命を唱えるこの政党内に受け入れられているかを見るのは興味深いことである。だから、大統領のアレマン (Aleman) は、ロペス・マテオス (Lopez Mateos) や、ディアス・オルダス (Diaz Ordaz) と同様に、この政党の制度的な枠を超えないで、その政府によって右よりの傾向を表わすことができたのである。すなわちその政府は、外資と協力して工業発展を促進し、米国との関係を正常化し、教会と国家との反目を克服したのである。

1968年の大学問題を理解するための重要な事項として、暗黙裏に認められている、大統領候補の選定制度について、触れなければならない。というのは、1970年にはディアス・オルダスの後継者を選挙しなければならないからである。メキシコの政治用語の中では、この制度は「エル・タパード (El Tapado)」という名前で知られている。

立憲革命党が圧倒的な勢力をもっているために、大統領選挙には自由競争が存在していないので、立憲革命党の候補者は党大会で全く自由に選出されるのだと考えられるかも知れない。しかし、実際は、古くからの慣習によって、候補者を指名する権限は、ほんの限られた人たちの手に委ねられてきたのである。今日では、革命後の大統領経験者たちが将来の大統領を正式に任命しているのである。さて、候補者は、普通、政権を担当している内閣の閣僚の中から選ばれている。そういうわけで、アビラ・カマーチョ (Ávila Camacho) から現在の候補者に至るまで、最近の大統領はすべて、以前の政府の大臣を経験してきている。彼らの大半は内務大臣であった。というのは、内政を担当するこの省から得る経験は、最良の教訓であり、その上、内務大臣は、大統領との緊密な協力関係にあるので、多くの場合、この党の政策における一貫性を保証するわけだからである。また、候補者が公式に宣明される前には、候補者に将来なるかも知れぬ人たちの間で、ひそかではあるが激しい闘争がある。そのため、何か政治的あるいは経済的な失策があれば、その人物は、革命の長老たちの支持を失うことになるのである。多くの場合、政敵は、将来候補者になるかも知れぬ人物から栄冠をもぎとろうとして、物議をかもしだすのである。時期を早まって自分の考えを表明するという冒険をおかすものは、将来、メキシコの大統領になるチャンスを、ほとんど確実に失うであろう。党大会で「dastapar」される、つまり候補者の「フタ」があげられると、その当選は實際上保証されることになる。これが「エル・タパード」の組織である。

III 1968年の学生運動の主要事件の経過

a) 7月16日、自治大学(Universidad Autónoma)と工科大学(Instituto Politécnico Nacional)との高校の学生を分けようとする、警察の干渉の結果、学生問題が起こった。これら二つの学校は、激しい反目が続けており、しばしば学生間に衝突を生んでいたのである。こんどの場合、動機はたわいないものであった。というのは、「スカート(faldas)の問題」をめぐってだったからである。中南米では、女性の中から争いをしばしばこう呼んでるのである。メキシコ市の警察隊は非常にあらあらしく干渉したので、それは、けんかをしていたグループを分けるかわりに、これらの学校と他の多くの学校の学生が団結して、この警察機動隊の解体とその隊長の罷免を要求するに至る原因となったのである。

b) この紛争の第二期は、7月26日のデモで始まった。この日には、二つの別個のデモが計画されていた。一つは、警察の先の行動に対する抗議であり、それは政府に圧力をかけて学生の請願を受け入れさせることを目的としていた。もう一つは、ちょうどその日が、カストロの反パティスタ戦開始の日を記念するものであった。後者は、明らかに、キューバのカストロの活動への支持という政治的意味をもっていて、極左分子によって指導されていたものと考えられている。続いてサン・イデルフォンソ(San Idelfonso)広場で起こった事からは、まだあまりはっきりしていないし、本稿の目的からは、それほど重要ではない。一つだけ述べておきたいこととしては、この後の方のデモが自治大学の全学的な全面ストを引き起こし、他のさまざまな大学も次第にそれに加わったことである。問題はエスカレートし、政府はあせって、日増しに暴力的な手段を取るようになった。というのは、オリンピックが近づいていたので、政府は威信と収入源の喪失をおそれて、どうしても早急な解決を求めなければならなかったからである。8月中は、学生たちは大学に引きあげ、扇動を続け、できるだけ多くの追従者をつのるよう努力していた。9月になると、この大学の学長自身が先頭に立った「沈黙のデモ」が組織された。これは静かに行進し、大多数の人々、とりわけ中産階級に支持された。軍隊や警察隊はどこにも現われなかったのである。しかしながら学生たちの請願には返答がないままだったので、事態は依然として緊張していた。極端な分子の中には、刻々と近づいてくるオリンピックを武力で阻止すると言って脅かすものもあった。

c) この運動がクライマックスに達したのは、学生が四文化広場、つまりテトラロルコ (Tetlalolco) において一大デモを計画した10月2日であった。政府はそれを禁止したが、学生は実力を用いて遂行しようと決心したのである。すでに何千人というデモ参加者が広場に集まっていたとき、突然、近くの幾つかの街路から軍隊と警察隊が現われた。多分、歴史は誰が最初に発砲したか証明できないだろう。しかし、一つだけ明白なことは、何百人という死者が広場に横たわっており、しかも、近隣の建物に住む罪のない人々が、これら二つのグループのこのような暴力衝突の犠牲となったことである。テトラロルコでの流血は、学生運動の氣勢をそぎ、それを窒息させた。軍隊は戦車や装甲車で自治大学を占拠する任務を帯びていた。相当数の人々が投獄されたが、そのなかには幾人かの指導者たちもいたのである。

Ⅳ この学生運動の特徴

a) これは先ず政治運動である。というのは、当初の原因と初期のスローガンを見れば、それが大学と警察力との対決であることがわかるからである。つまり、国家が大学と対決しているのである。だから、この事件の意味を解釈するにあたっては、大学と警察との関係の方を、大学の学内問題に対する不満という内部的動機よりも重要視しなければならないのである。1965年にこの大学のイグナシオ・チャベス学長の辞任を要求した時のように、以前の場合においては、学長の側に学生の出席の義務を課そうとしたように、大学内部にも理由があった。その場合には、このようなやり方で学長を解任しようと望んでいたディアス・オルダス大統領の政略をカムフラージュするのに、学生運動は利用されたのだと言えよう。

b) この場合、対立は、大学当局と学生との間ではなくて、国家と大学との間における問題であったのだから、この運動は教員と学生との一体性という特徴をもっていた。その証拠は静かなデモである。このため、軍隊による大学の占拠は促進されたのである。もちろん学長の同意はなかった。その結果、大学の自治という神聖な原理は犯されたのであった。

c) 最後の特徴としては、あの時期の国際的な意味が問題とされよう。すべての学生運動に典型的に見られることだが、学生は、大衆を扇動するために、その要求の中に国際政治面の動機を織り込んでいるのである。それは、単なる反米主義の場合も多いが、もっ

と具体的な性格をおびていることもある。当時、メキシコはオリンピック前夜にあたっていた。それは、政府の国際的な威信を確立するチャンスであった。学生問題とその要求が国内の水準に限定されている時には、政府は、自己の安定あるいは威信をたいしてそこをわなないで、権力の立場で一種の政治的解決を見つけることができた。しかし、国際的要因がからんでくると、解決は一層困難となったのである。というのは、それによって政府は進退きまわった立場におかれたのは、他方、それは大学に対しては大衆の感情を燃えたたせる有力な武器をもたらしたことになったからである。

これら三つの主要な特徴からして、1968年におけるメキシコの学生デモの意味の解釈としては、それが、先に述べたように全く政治的色彩をもつものであったということになる。

V この学生運動の解釈(注3)

- (1) マルクス主義者とラサロ・カルデナスに従う立憲革命党極左の人たちは、この運動を真の革命への最後の過程だと解釈している。彼らにとっては、現在の革命は厳密にはマルクス主義的なものではないので、それは革命という名前にふさわしくないのである。さらに、実際には、歴史に見られるように、メキシコ革命は当初の活力を失ってきているのである。明らかに、共産党は、学生ストを、モレリアなどの鉄道労働者の闘争につらなるものとして解釈することを望んでいた。彼らの考えでは、革命はすでに何年も以前からあたためられてきていたが、それは政府の武力弾圧にあってきたのである。さて、マルクス主義のイデオロギーに基礎を置くこの解釈は、学生は社会の矛盾を一層純粋に感ずるので、彼らは革命に燃え発の起爆剤であるということを前提としている。この考えを適用することは、全体として非常に欠点が多く、また、それは、革命がすでに実現されている社会主義諸国における学生運動を説明していないのである。さらに、メキシコの場合には、学生運動は待ち望まれた革命をもたらさなかった。それは、単に政府が武器をもっていただけではなく、大衆の側からの支持がなかったからなのであった。目撃者の証言によれば、学生デモは、ごみごみとしたプロレタリア街をよぎるときよりも、中産階級の住宅街を通るときの方が、ずっと多くのかさいを受けたのであった。

- (2) 第二の解釈は、先に述べたメキシコの政治状況を分析しようとしている。つまり、伝

統的な政治家たちが、当初の騒乱事件を利用して、候補者となる可能性のある人物たちを互いにきっこうさせ、そうすることによって望ましくない潜在的候補者を排除しようとしたのである。当時すでに、「タバード」は、ディアス・オルダスが支持する内務大臣のルイス・エチャベリア（Luis Echevarria）だといううわさが流れていた。人によっては、前メキシコ市長ウルチュルトゥ（Uruchurtu）の名前をあげていた。彼はオリンピックの準備中に免職されたのである。他の人たちの名前も政界のうわさ話にのぼっていた。全体としてこのようなことの証拠としては、警察と軍隊との足なみのそろっていない態度があげられていた。警察は内務大臣に従属し、軍隊は国防大臣に従属していたからである。

- (3) 第三の解釈は、問題を、C I A や国際共産主義のような外国勢力の干渉のせいにする人たちのものである。C I A が、軍部によるクーデタの企ての糸を引いたのだとするのである。というのは、軍部は、どうしてもオリンピックを実現させなければならぬと考えていたからである。ラテン・アメリカに新しい軍事政権ができれば、米国の資本主義の権益を強化するのに役だつだろう。アルゼンチンとブラジルはすでに軍人の手に落ちていたのだから、その経済力によってラテンアメリカで特別な地位を占めるメキシコが、米国の反動分子の主要目標となったのだとする。この解釈は、国際共産主義にも決定的な影響力を認めている。というのは、メキシコは、キューバと国交を維持しているラテンアメリカで唯一の国であり、多くの国からの左翼の政治亡命者にとって、いわば隠れ家となっていたからである。多分、国際組織の影響を否定することはできないが、この事件がC I A のしわざだという考えは単純な間違いを犯しており、事実の裏づけをもっていないのである。

これらの考えの中でもっとも是認できるのは、多分、学生運動をまったく政治的な現象として説明するものであろう。そこでは、P R I のさまざまな候補者が、将来の大統領を選ぶ時期において、一層有利な立場に立とうとする目的で、術策をろうしようとしたとするものである。多分、その証拠としては、現在のディアス・オルダス大統領が、1969年9月の国民への教書の中で、当時の事件の責任をすべて彼自身のせいに行っていることが挙げられよう。メキシコ憲法によれば大統領は再選できないので、ディア

ス・オルダスは、将来の候補者へ自由な道を残すために、あがないの羊の役を引き受けたのである。後になって判明したのだが、候補者として、つまり次期の大統領として、PRIの幹部によって選ばれたのは、まさしく内務大臣エチャバリアであった。彼は、当然、学生問題を解決するために直接に行動した人物である。大統領は、自ら責任を取ることによって、内務大臣にかかってくる汚点を取りのぞいてたのである。

結 論

学生と政府との対決を急がせた政治戦術がどんなものであったにせよ、結論としては、メキシコ革命によって設けられた組織と、その単一政党は、大変強い打撃をこうむり、それがこのような形の運動に対処する能力があるかどうか疑われているのである。

テトラロルコの虐殺はあまりに極端なものになったので、平和的手段によって解決を見いだすために政府の弱点を露呈することになったのである。立憲革命党は、これまでは、たいして犠牲者を出さずに、秩序と平和を維持するのに成功してきていた。「エル・タパード」の組織は、この政党内部における政略の道具として利用されてきてはいたが、7月から10月にかけて見られたような暴力的風土を生み出したことは、それまでにはなかったのである。現在では、権力の平和的移行は、空虚なスローガンとなってしまったのである。

メキシコの青年に対しては、立憲革命党を牛耳っているグループの守り札とされてきた、「革命の一員 (Familia Revolucionaria)」という輝かしい名前は、その魔力を失ったのである。革命後50年以上たち、書物を通して読み取った理念だけしかもっていない青年たちが、サバータやパンチョ・ビリャと一緒に戦った世代と同じように反応しないのも、当然のことであろう。この点に、すべての学生運動は世代の問題から生ずるという理論が、事態を解釈する上で果す役割の根拠があるのである。

二つの世代の間の生活経験は大変に食いちがっているもので、かつてメキシコ国民を揺り動かせたスローガンも、現在の大学生の胸を打たなくなっているのである。そういうわけで、政府が、問題の解決を見いだそうとしてメキシコ人の愛国心に訴えたときに、穏健ないくつかのグループの支持を取りつけた唯一のこととしては、オリンピックを排斥しないという約束だけであった。「革命」という魔力的な言葉が、まだ当初の吸引力を保持していたとすれば、多分、10月2日に死亡したような多くの罪のない人々の生命の犠牲は避けることがで

きたであろう。

さて、このことをよく見てみれば、近年、メキシコで起っている社会変化と、その結果として当然に生ずる政治的矛盾について、われわれはもっと立ち入った研究をしなければならないことがわかる。私は、この現象について、機会があれば、もっと進んだ研究をしてみようと考えている。ここでメキシコを取りあげたのは、発展途上国において政治機構が社会変化を反映しない場合に起こり得る事態の具体的なケースとして、それを扱ってみたかったからなのである。(注4)

(注1) Feuer, Lewis; The Conflict of Generations, Basic Books,
1968。11頁。

「学生運動は、彼らが政治的イデオロギーの中で解明しようと試みている目的に鼓舞され、情緒的な反抗に動かされた学生たちの結びついたものだ」と定義できよう。その反抗の中には、古い世代の価値の排除をとまなう、一種の失望感がいつでも現われているのである。さらには、学生運動家は、彼らの世代は古い世代や、他のエリートや、他の階級がやりとげられなかった特別な歴史的使命を遂行するのだという確信をもっている。」

(注2) Padget, Vincent; México's one-party system, a revaluation.
"American Political Science Review, Vol. LI, No. 4, 1957年12月。
"The Dynamics of Change in Latin American Politics," John D.
Martz 編, Prentice Hall.

(注3) この現象のさまざまな解釈については、次書を参照。 Angel Palerm 教授,
Dimensiones humanas del mundo, El movimiento estudiantil;
notas sobre un caso, "Comunidad" 18, Cuadernos de difusión
cultural de la Universidad Iberoamericana, México, 219~231頁。

(注4) メキシコ史については、次書を参照。

Herring, Hubert; A History of Latin America, New York,
Alfred Knoph, 1965.

立憲革命党(PRI)の歴史については、ラテンアメリカ事典(メキシコ)、ラテンアメリカ協会、1968。も参照。

メキシコの学生運動とラテン・アメリカの社会変動 -

学生の政治デモの詳細については、雑誌「Porqué」15号、1968年9月11日、1968年10月30日、1969年1月10日、および当時の特別号を参照のこと。